

第5節

B-1区の概要

第1空堀と第2空堀間に囲まれた第1郭にあり、1郭の南西端隅にあたる。

調査区の北西部、南東部はすぐに急落して急崖を形成する。B-2区に近接しており、北東約150mにB-2区をみる。B-1調査区は本年度調査した区画のなかで、唯一、トレンチャーによる攪乱のない調査区である。

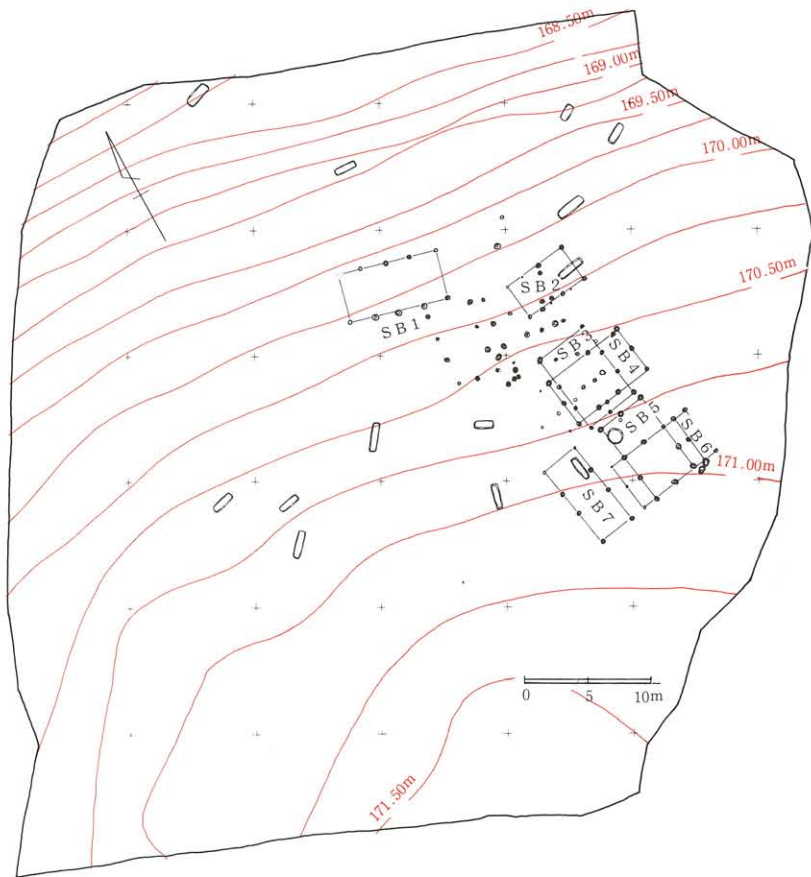
赤ホヤ火山灰上層で表土を剥いだ段階で地形で見ると、南から北へ緩かに傾斜している。

検出された遺構は、掘立柱建物7棟（中世）、柱穴群、土壇である。掘立柱建物は発掘区中央から東側に集中して検出されているが、主軸方向から2群に分けられる。南北方向に主軸をもつもの（SB3、SB5、SB7）、東西方向に主軸をもつもの（SB1、SB2、SB4、SB6）、である。柱穴の検出数からして掘立柱建物が効率的に建ち、建てかえはみられるものの比較的短期間の居住域だったとおもわれる。

1. 遺構

1号掘立柱建物（B-1区）

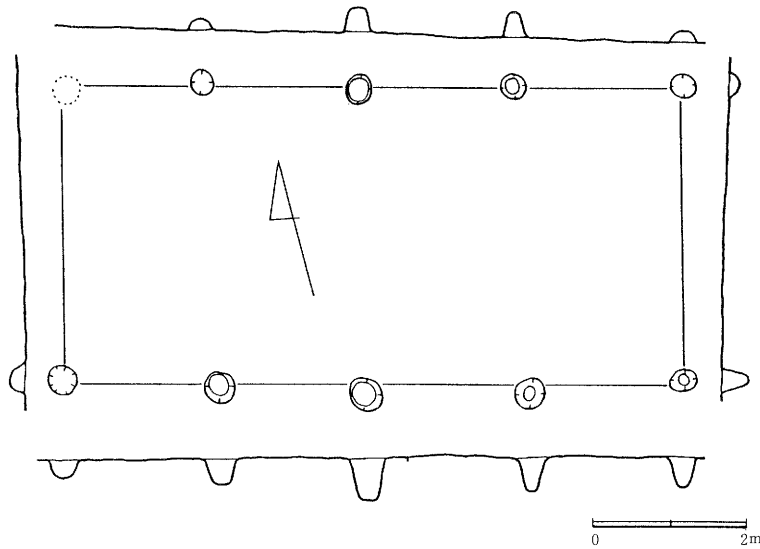
比較的密集して検出された7棟のうちでも、やや離れて北端に位置している。主軸方向が東西方向にある一群に属するがこの1号のみがやや主軸北西にふれている。4間×1間で規模は桁行8.0m、梁間3.1m、柱穴の径は28cm～44cm、深さ10cm～49cmの間である。柱穴のうち北西隅の一つは削平されているものとおもわれ、検出していない。面積は31.2㎡で、B-1区検出の掘立柱建物中에서도最も規模が大きい。



第26図 紙屋城址遺跡B-1区発掘区遺構配置図(1/600)

2号掘立柱建物

SB2は床面積が15.9㎡と本遺跡検出の掘立柱建物中でもっとも小規模である。3間×1間の規模は桁行5.3m(1.4m・2.0m)、梁間3.9mであるが、桁行間の南北中央柱列は整然と対応せず、また柱間の距離にも差がみられる。桁行の方向はSB4・6と並行し、SB3・5・7と直行する関係となる。



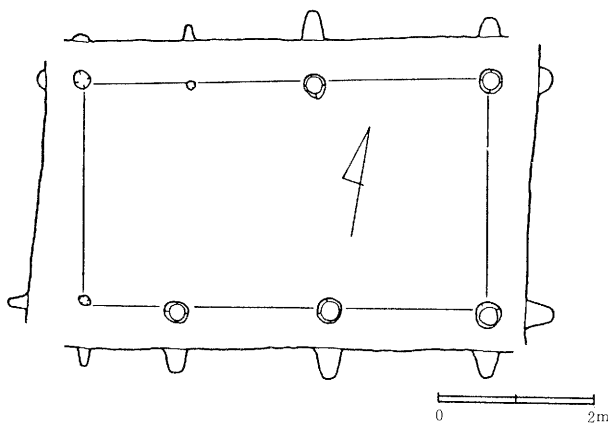
第27図 1号掘立柱建物実測図（B-1区）1/100

3号掘立柱建物

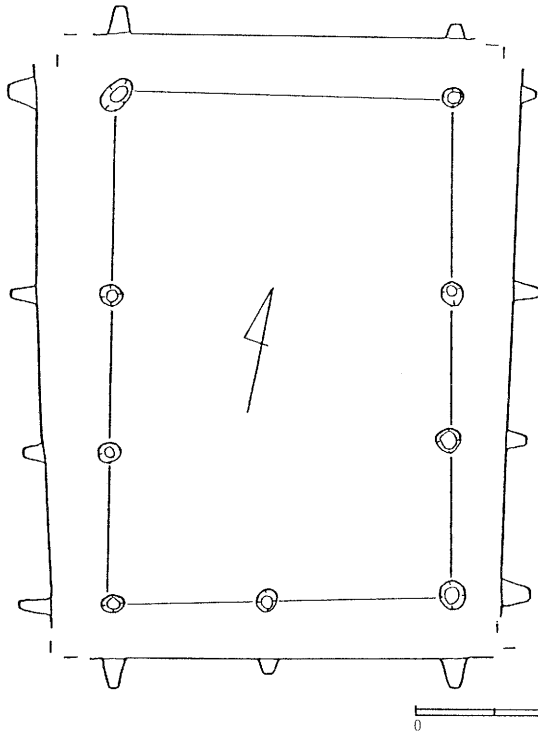
桁行方向がSB4と直行し、重複関係にある3間×2間（北側は1間）の掘立柱建物である。桁行の方向からSB5と対になり、またSB7と同時性をもつと窺われる。規模は桁行6.8m（2.0m・2.4m）、梁間4.3m（2.2m）で、床面積27.72㎡となる。柱穴の直径26cm～44cm、深さ19cm～41cmの間である。主軸方向はN10°W。

4号掘立柱建物

SB3と桁行方向で直行し、重複する掘立柱建物である。SB2・6とは桁行方向で平行する関係となり、同じくSB5・7とは直行する関係にある。またSB3とは、SB5とSB6のように柱穴自体の重複関係はみられない。北側桁行柱列に一つの柱穴を欠くが、3間×

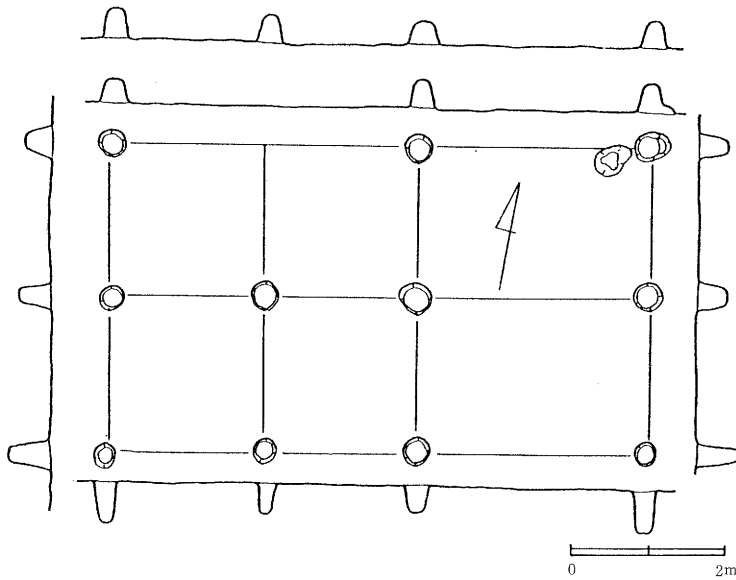


第28図 2号掘立柱建物実測図（B-1区）1/100

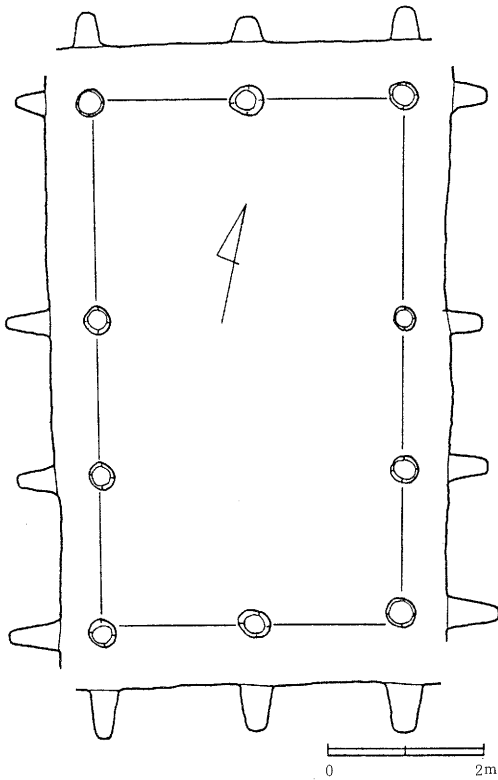


2間の総柱建物を意図したものとおもわれる。規模は桁行6.9m(2.0m・3.0m)、梁間4.0m(2.0m)。床面積は27.8㎡でS B 5とほぼ同規模である。

第29図 3号掘立柱建物実測図(B-1区) 1/100



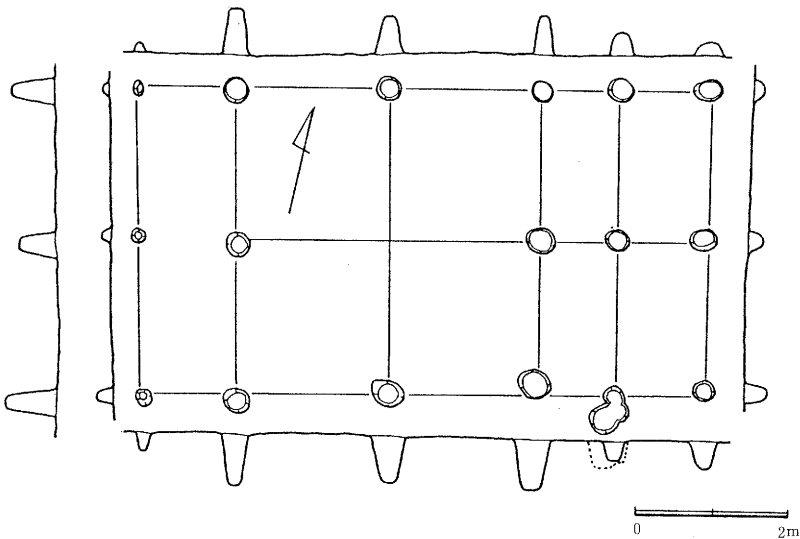
第30図 4号掘立柱建物実測図(B-1区) 1/100



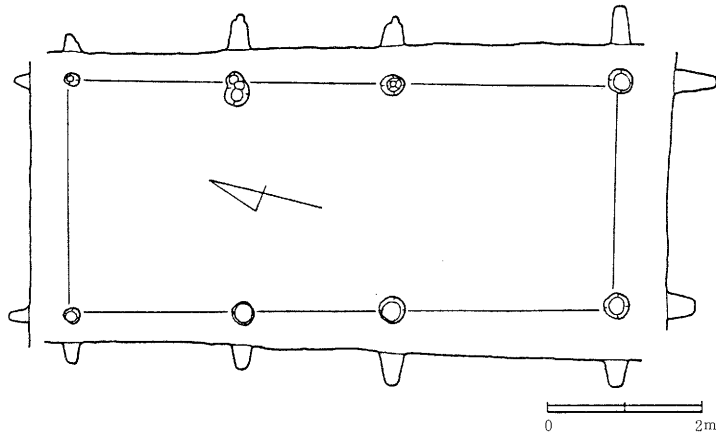
5号掘立柱建物

7つの柱穴がSB6と重複する3間×2間の掘立柱建物で、SB6と桁行方向で直行、重複している。桁行6.9m(2.0m・3.0m)、梁間4.0m(2.0m)規模の桁行・梁間のバランスがとれたタイプである。床面積は27.6㎡でSB4とほぼ同じ、SB3・7との同時性が窺える。

第31図 5号掘立柱建物実測図(B-1区) 1/100



第32図 6号掘立柱建物実測図(B-1区) 1/100



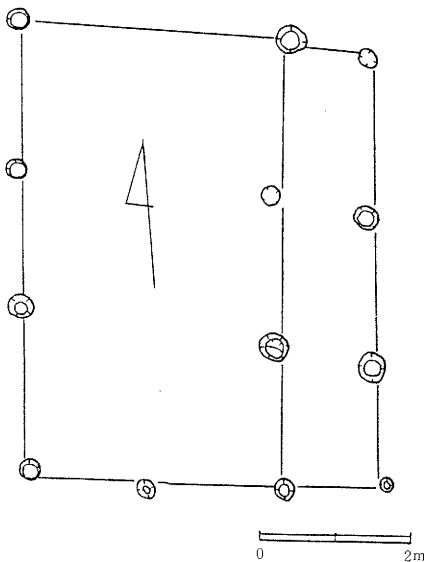
第33図 7号掘立柱建物実測図 (B-1区) 1/100

6号掘立柱建物

S B 5 と桁行方向が直行する掘立柱建物。S B 5 と 7 つの柱穴を共有しており、建て替えがおこなわれたことを窺わせる。S B 6 は 4 間× 2 間で西側に一面廂を有する建物であるが、梁間に中央柱列が桁行方向に並んでおり、中央の一柱穴を欠くものの総柱建物であろうとおもわれる。規模は桁行7.4m (2.0m・1.0m)、梁間4.0m (2.0m) で床面積24.4cm²。廂を含めた床面積は29.6m²である。

7号掘立柱建物

S B 5・6 とともに発掘区の南端に位置している。ことにS B 5 とは、並列しており、桁行の長さ、方向ともまったく同一であり、同時期、同時性がある。3 間× 1 間の桁行に対して梁間の狭い南北に細長い建物である。桁間7.1m (2.0m・2.9m)、梁間(3.0m)を測り、床面積は21.0m²である。



第34図 8号掘立柱建物実測図 (B-1区) 1/100

8号掘立柱建物

S B 1 と S B 2 の間に位置する。3間×1間に東側一面廂を設けるものである。全体にややゆがんでいて、長方形プランを呈しておらず、桁行の東西柱穴などずれが大きく平行四辺形状プランとなっている。このB-1区ではこのS B 8のみが、ややラフに造られており、主軸の方向も、同じ南北方向を示すS B 3・5・7に比べてやや東側にふっている。規模は桁行5.9m (2.0m)、梁間3.4m。床面積は19.47㎡。廂を加えて26.55㎡である。

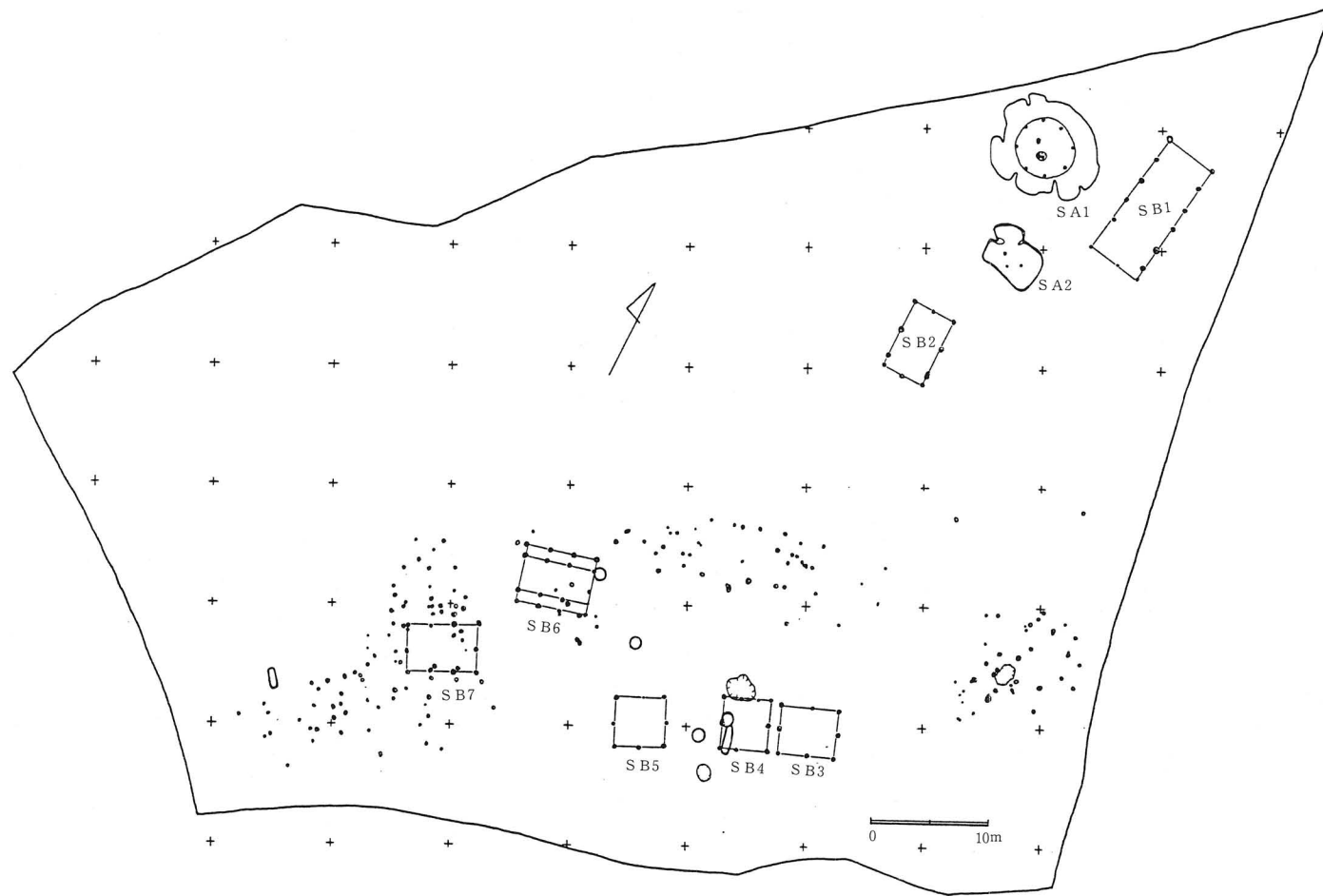
第6節 B-2区の調査

第1郭のはぼ中央部に設定した東西100m、南北60mの約5,570㎡、標高171mの発掘区で、B-1区に隣接する。発掘区の東側は南北方向に約100m入りこむ浅い谷地形となっているが、原地形はおそらく現在よりも深い谷状地形であり、その南端から空堀が穿たれて、一郭南端の深い谷とむすばれ、B-1、B-2区の位置する平坦面は独立した一郭を形成していた可能性がある。

調査にあたっては、土層確認のためのトレンチを数ヶ所に設定した後、重機によって赤ホヤ火山層直上で全面にわたって剥いている。赤ホヤ火山灰層直上を全面精査の結果、弥生時代後期初頭の竪穴住居址2軒、中世の掘立柱建物跡7棟が検出された。発掘区は農道道路敷の部分幅約5m、長さ60mの範囲を除く全てが北西～南東方向のトレンチャーによって攪乱されているが、遺構の分布が比較的疎であることもあって、トレンチャーによる遺構破壊は、遺構全体の把握にとって最少限にとどめられている。

弥生時代の竪穴住居址は、発掘区北部に2軒隣接して確認している。2軒とも弥生時代後期初頭から古墳時代後期にかけて日向を中心に特徴的に出現する花卉状の特異な突出部を巡らすいわゆる花卉状住居址で、一軒(S A 1)は円形住居を基調として花びら状の突出を巡らすもの、一軒(S A 2)は正方形住居を基調として長軸上2ヶ所に突出部を設けるものである。

B-2区で合計7棟検出した掘立柱建物は、大きく二群に分けられる。おおよそ南方向にその主軸をもつ一群(S B 1、S B 2)、おおよそ東西方向にその主軸をもつ一群(S B 3・S B 4・S B 5・S B 6・S B 7)である。柱穴埋土中に遺物を含む例は少ないが、数ヶ所から青磁、白磁等の輸入陶磁器が出土している。全般に掘立柱建物の検出棟数に比較して、柱穴検出数が少なく、これもある限られた短期間の居住域だった可能性が高い。



第35図 紙屋城址遺跡B-2区遺構配置図(1/600)

1. 遺構と遺物

① 1号竪穴住居

発掘区最北端隅にあり、2号竪穴住居址から北へ約10mのところの位置している。いわゆる花卉状の突出部をもつ竪穴住居址である。この住居址の全体の規模は南北径で8.0m、東西径で9.45mの不正円形となり、同じく不正円を呈する中心部は最大径が5.0m、最小径が4.6mを測る。外縁となる突出部は、すでに大きく削平されており、浅い箇所では検出面からわずかに数cmを残すのみとなり、輪郭さえ不確実な部分がある。内円の床面に対して、外縁突出部床面は高くつくられてその比高は削平されているところで約3.0cm、比較的好く残っているところで約10cmほどある。

内円の円周に沿って8個の柱穴がほぼ等間隔にめぐっている。柱穴は直径22~30cmの円形を呈し、深さは床面から85cm~90cmを測る深くしっかりしたものである。

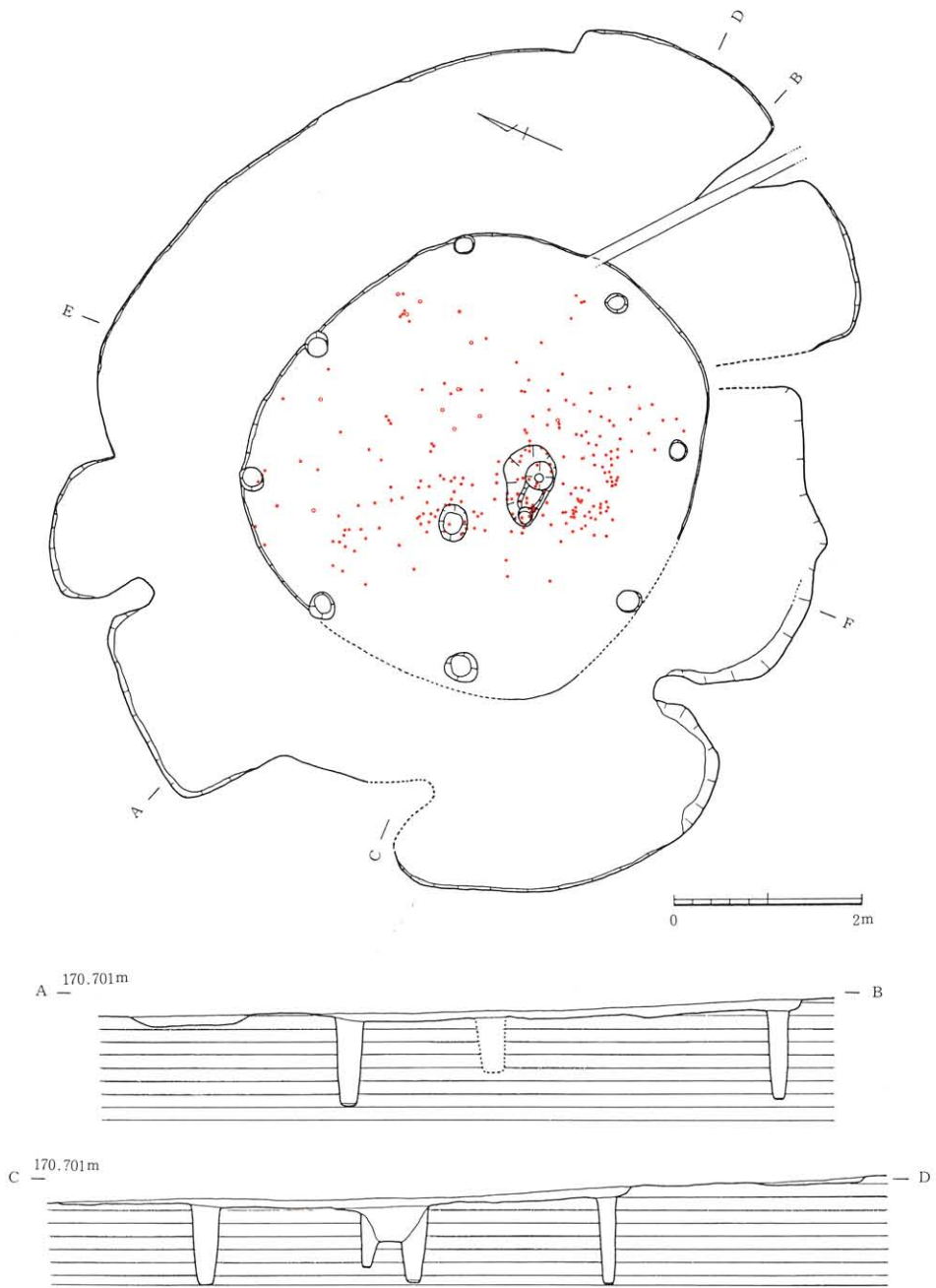
内円の中心部付近には、2個の大きな柱穴がNW-SE方向に並んでいる。ひとつは長径40cm、短径30cmを測る楕円形のもの、ひとつは長径85cm、短径55cmを測る長円形の掘り込み内に、大小の深い柱穴を有するものである。外縁の突出部は、隅丸の方形を意図しているとおもわれるが、いずれも不定形状で、6つの小はりだし部と、北縁に連続したはりだし部がある。

当住居址は、遺物の項で述べるように石器（磨製石鏃）製作の場として使用された可能性がある。

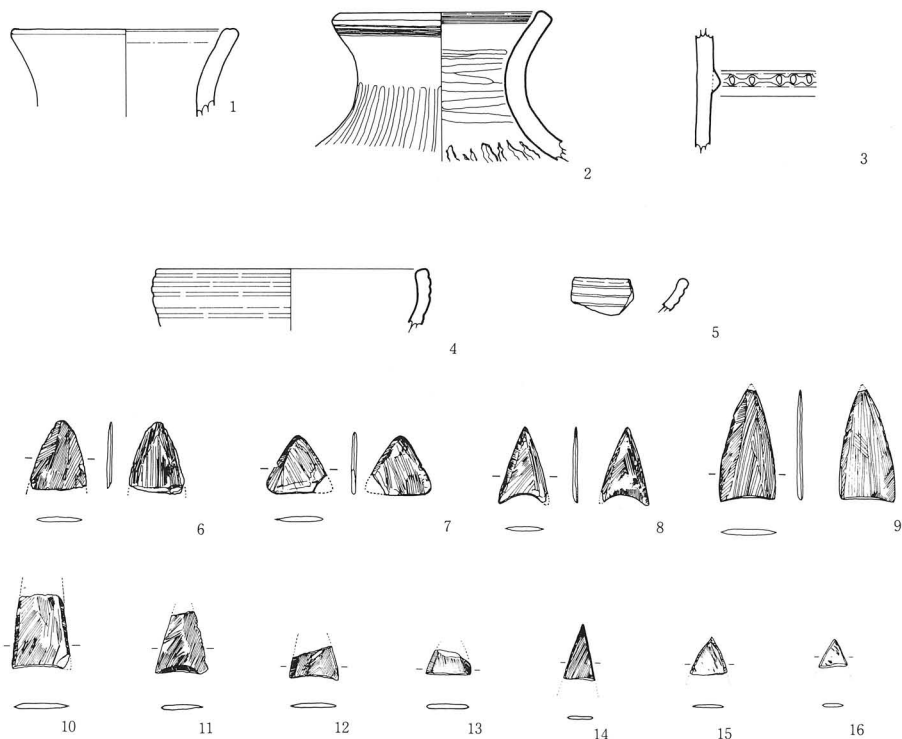
② 1号竪穴住居出土遺物（第37図）

1号竪穴住居からは弥生土器5点、磨製石鏃11点、砥石6点泥板岩剥片248点が出土している。

1.は単口縁壺の口縁片で濃い茶色を呈し、口縁端をやや凹んでいるのが特色。2.は壺形土器の口縁付近で推定口径7.7cmを計測する。口唇部の外面および内面の直下に明瞭なヨコナデ調整痕を残している。外面の調整は頸部以下タテ方向の丁寧なヘラ調整。内部の頸部調整はヨコ方向のヘラ調整である。以下タテ方向の不整なタタキ調整に似た調整痕が観察される。胎土に1.0mm大の長石を多く含んでいる。また3.0mm大の白色石英を少し含む、内外とも橙色を呈し、焼きは比較的堅緻である。3.は甕形土器の刻目突帯部で、口縁に近い部分かとおもわれる、風化が著しくひどく磨滅しており、砂粒がポロポロ落ちる。胎土に砂粒、石英、長石、角閃石がほぼ均等に含まれている。4.5.は凹線文を口縁部に施す土器で、器形は高坏形を呈するとおも

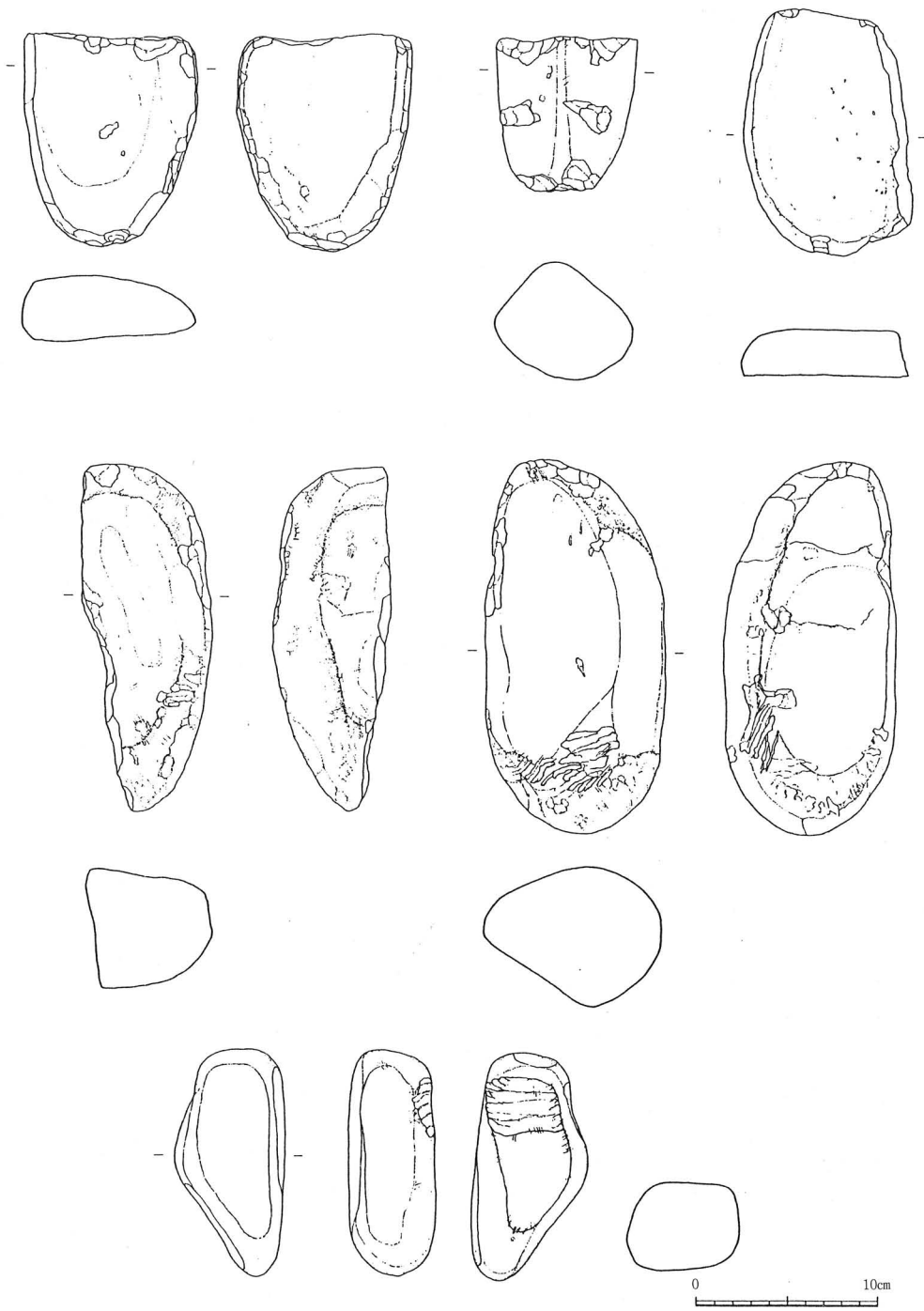


第36図 紙屋城址遺跡B-2区1号竖穴住居実測図(1/80)

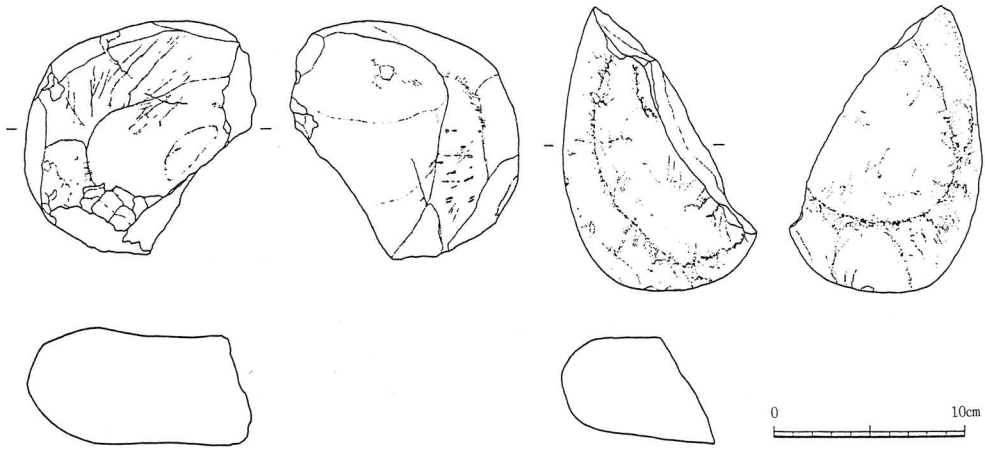


第37図 1号竪穴住居出土遺物実測図(1/3)

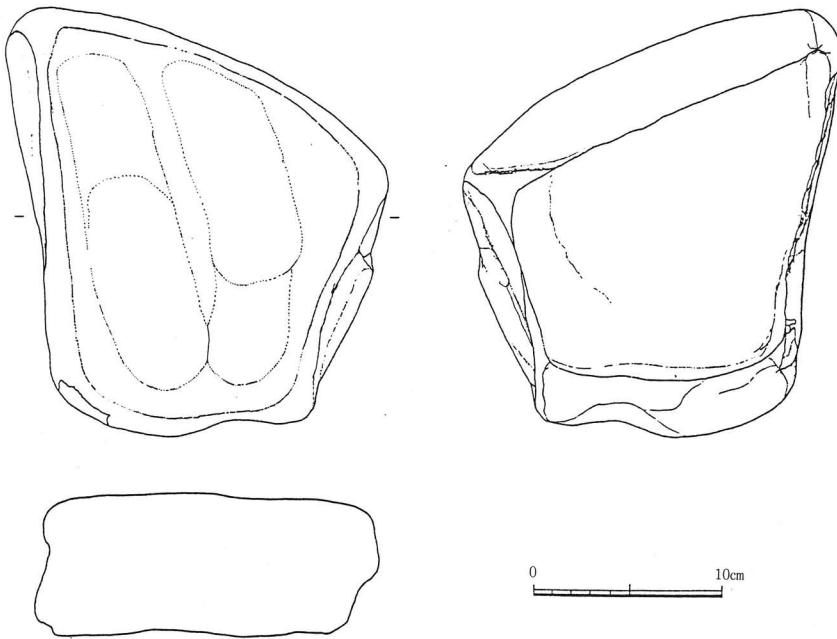
われる。推定口径9.8cmと小形である。胎土に多くの長石を含み、4.0mm大の白色石英を時に含む。焼成、胎土から在地産とはおもわれない。搬入品であろう。内外とも灰褐色を呈する。6.~16.は磨製石鏃。7.8.9はほぼ完形。7.は正三角形で、形状を他と異にする。この他に、約250点の石鏃製作時の剥片とおもわれる小片、細片が、住居中央部を中心に出土している。



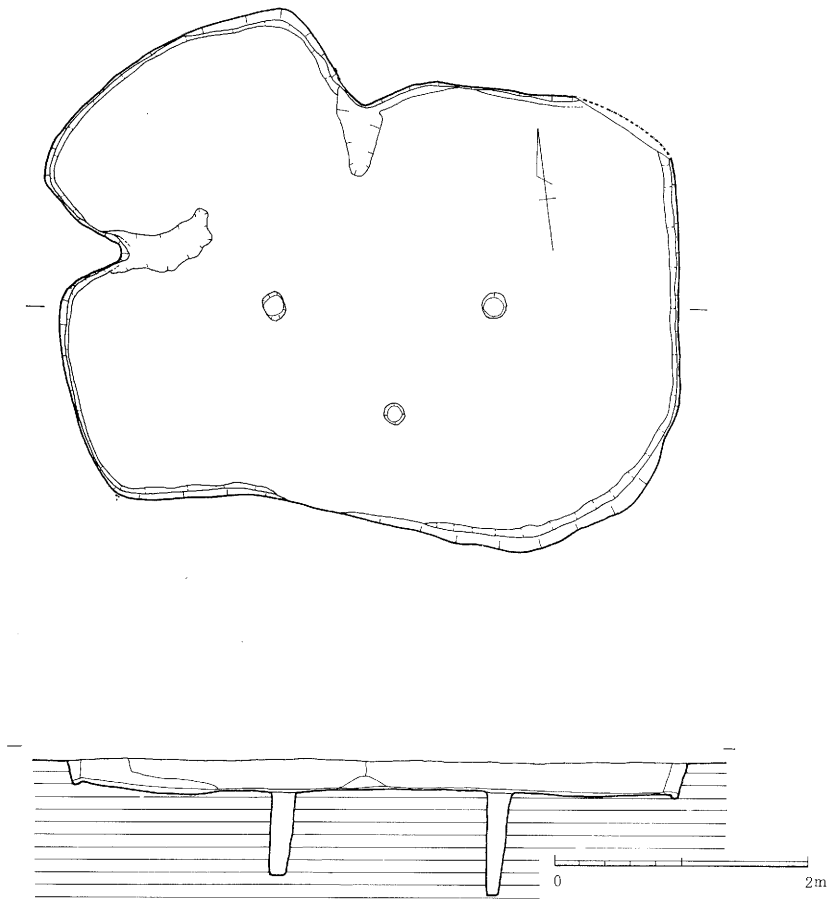
第38图 1号竖穴住居出土石器实测图(1)(1/4)



第39图 1号竖穴住居出土石器实测图(2)(1/4)



第40图 2号竖穴住居出土石器实测图(1/4)



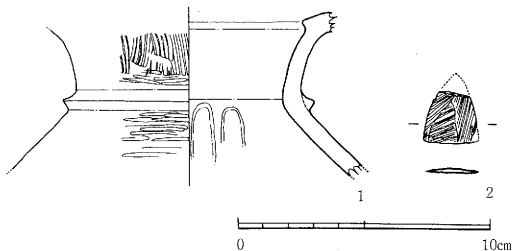
第41図 2号竪穴住居実測図(1/60)

B-2区

③ 2号竪穴住居 (41図)

1号竪穴住居の南、約10m(中心より中心まで)に隣接する。方形住居プランを基調として北西隅に2.4m×1.4m、西端に1.6×80cmほどの不整形突出区画を2ヶ所設けるもので、長軸方向にY字形状を呈する。長辺4.4m、短辺3.3mを測り、総床面積約15.72㎡である。床面は、突出区画と中心部居住区画に段差はなく、検出面よりの深さは25~32cmある。長軸方向(東西)に径20cm、深さ69cm、82cmの主柱穴とおもわれる柱穴2孔(柱間170cm)と、中央南よりに同じく径20cm、深さ28cmの柱穴1孔、あわせて3孔の柱穴が穿たれている。なお床面に焼土、その他の付帯施設

をもたないが、側壁に沿って幅10cm内外、深さ5cm内外の側帯溝が、突出区画も含めて、住居跡全体にわたって巡っている。遺物は床面より土器片4点、砥石2点が出土している。



④ 2号竪穴住居出土遺物（第42図）

1. は鋤先口縁形を呈する壺形土器の口縁部である。口縁端部を欠いている。頸部に刻目のない断面三角形の突帯をもち、口縁端から突帯間の外面はタテ方向のハケメ、その下部はヨコ方向の細かいヘラミ

ガキ調整、突帯下も細かく丁寧なヨコ方向のヘラミガキ調整となる。内側は頸部の屈曲付近までヨコナデ、頸部下はタテ方向の指頭圧痕がみられる。外面、黒褐色（5 Y R 1 / 3）、内面にぶい赤褐色（5 Y R 5 / 3）をしており、胎土に角閃石、細砂粒、2mm前後の砂粒を含む。2. は先端を欠く磨製石鏃。暗灰色を呈す泥板岩製。

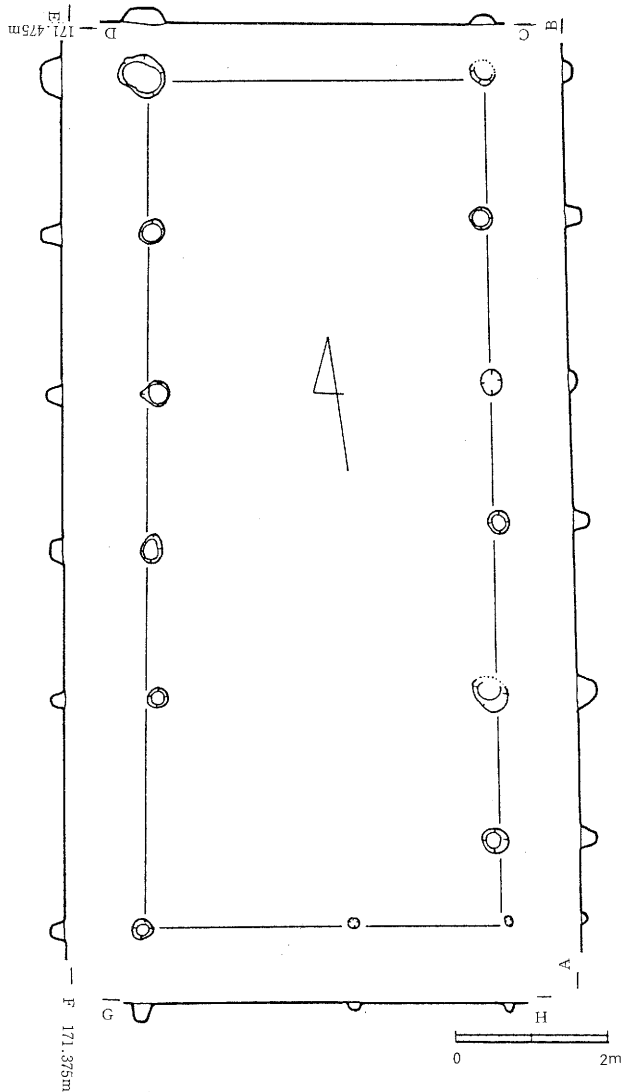
⑤ 1号掘立柱建物（B-2）

本遺跡検出の掘立柱建物中もっとも規模の大きなもので、床面積52.8㎡を測り他の平均的建物の2倍以上の床面積を有する。掘立柱建物としてはもっとも北端に位置し西側に隣接して弥生時代の竪穴住居（S A 1. S A 2）がある。

桁行11m・梁間4.8mであるが西側の桁は5間、東側のそれは6間ある。梁のほうも北側1間、南側2間と不統一で、桁行の柱穴も東西で対応していない。主軸はN 9° Eで、S B 2とほぼ同一方向である。柱穴径の平均25cm、深さ10~26cmを測り上層は大幅に削平されている。

⑥ 2号掘立柱建物

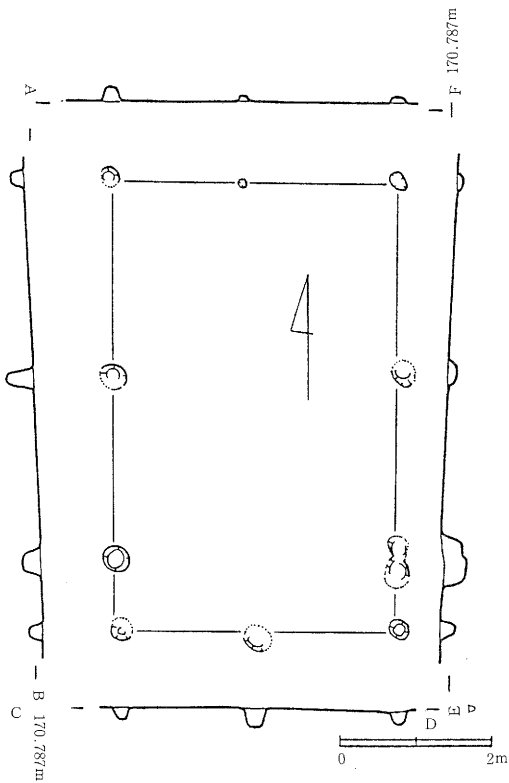
S B 1の南南西約20mに位置し、S B 1と桁行方向で同一方向をとる3間×2間、6.0m×3.7mの建物である。桁行を東西方向にとるS B 3・4・5・6・7の一群から北に約30m離れて、S B 1とともに別群に属する。東西桁行の2柱穴が南側に寄っており、柱間寸法が0.9mと2.5mの二種あってアンバランスである。梁間の柱間は1.8m。柱穴径の平均は30cm、深さは7.5cm~36cmある。床面積22.2㎡。



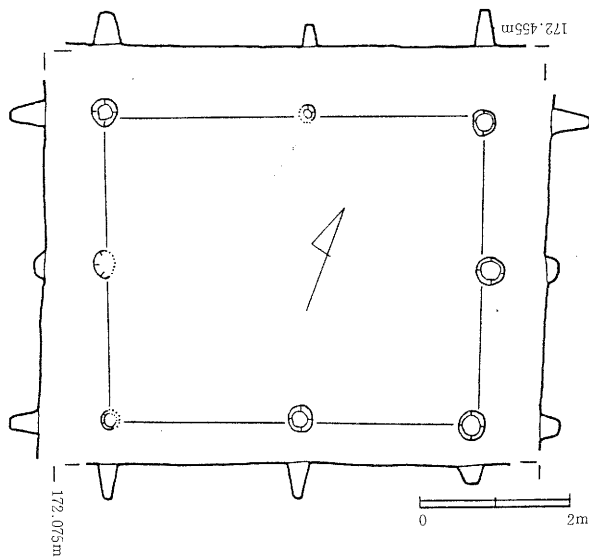
第43図 1号掘立柱建物実測図（B-2区）（1/100）

⑦ 3号・4号掘立柱建物

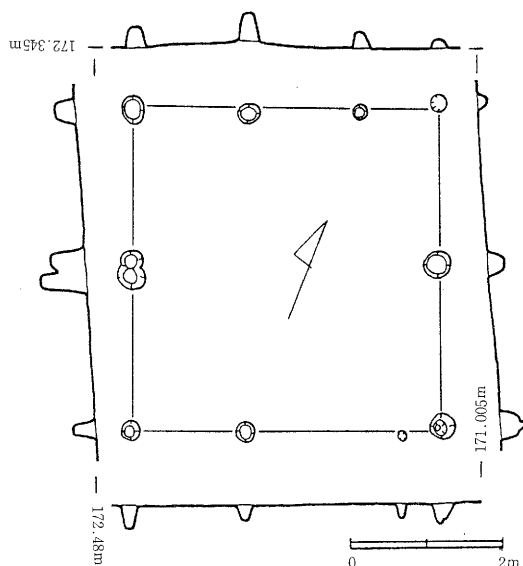
桁行を東西方向にもつ一群に属するがその中でも、SB4・5とともにもうひとつの別のグループに分別できる。SB3・4・5は極めて近接した建物で、プランも正方形に近いプランをもっており、他とその機能を異にするとおもわれる。



第44图 2号掘立柱建物实测图 (B-2区) (1/100)



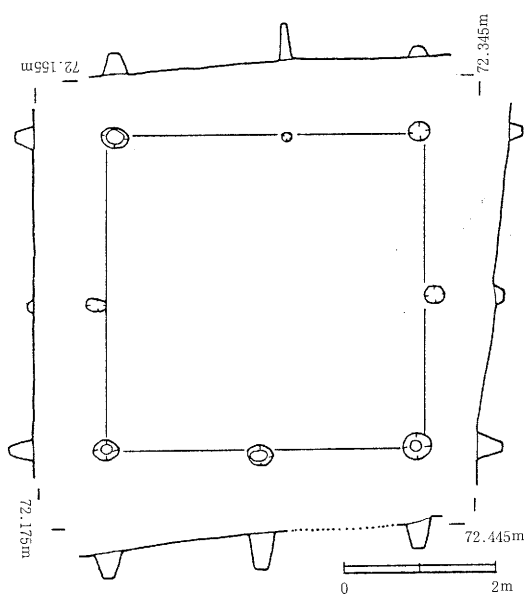
第45图 3号掘立柱建物实测图 (B-2区) (1/100)



第46図 4号掘立柱建物実測図 (B-2区) (1/100)

S B 3はS B 4に隣接し、S B 4とともに考えるべきものかもしれない。2間×2間の建物で桁行5.0m(柱間2.5m)、梁間4.0m(柱間2.0m)と他の長方形プランの建物と比較して正方形に近い形状をもつ。桁行方向N20° E。床面積18.72㎡である。柱穴の平均径30cm、深さは13cm~49cmまでである。

S B 4は3間×2間の建物であるが、プランは一辺4.0mの正方形を呈する。桁行間の2柱穴は南北で対応せず、柱間寸法も北側で1.5mと1.0m、南側で0.5m、1.5m、2.0mである。柱穴径平均30cm、深さ9cm~58cmで床面積は16.0㎡である。



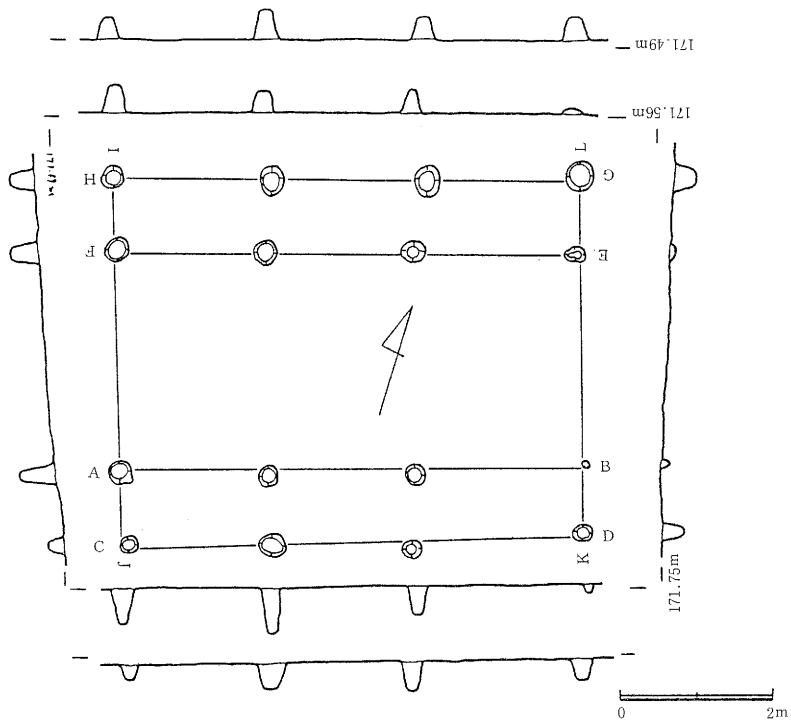
第47図 5号掘立柱建物実測図 (B-2区) (1/100)

⑧ 5号掘立柱建物

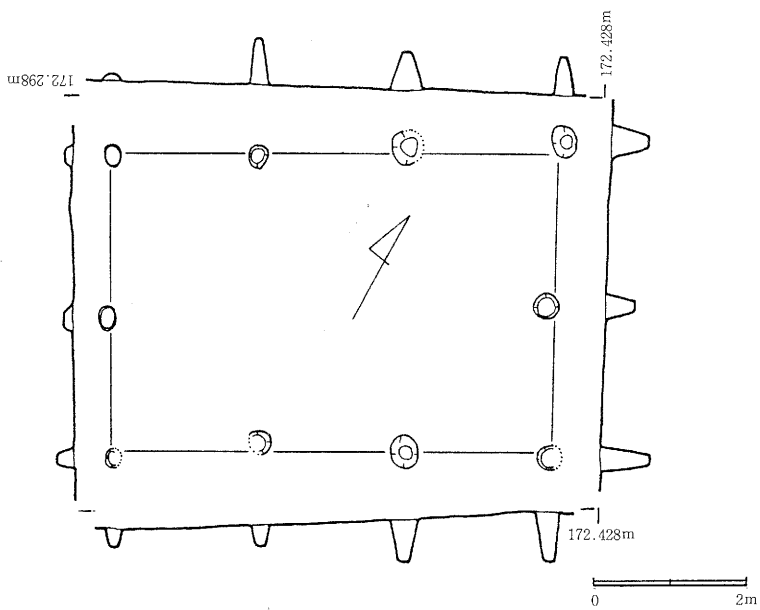
S B 4から5m西に位置する一辺2.0mの2間×2間の正方形プランを有する建物。プランの中央には柱穴はなく、総柱にはならない。床面積はS B 4とまったく同じで16.0㎡である。

⑨ 6号掘立柱建物

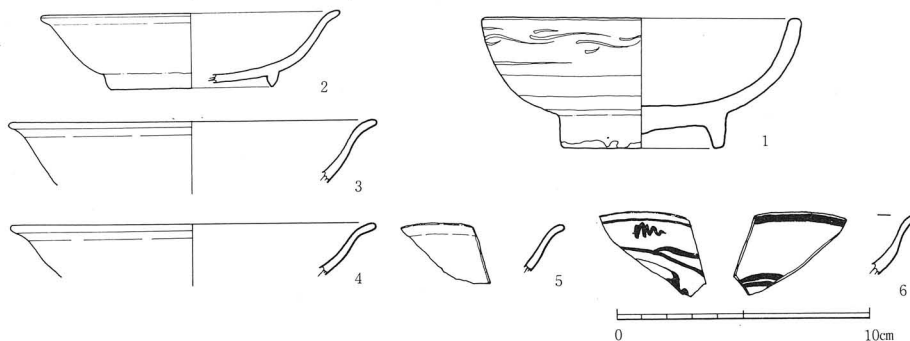
東西方向に方向性を有する一群に属する。1間×3間の長方形プランを有する建物を基本に、南北の両翼に3間の廂を有する。廂の柱穴は基本の掘立柱建物を構成するそれと、直径、深さとも遜色ない。柱穴掘り形は殆ど円形で、径は25~35cm深さは検出面より7.5cm~



第48图 6号掘立柱建物实测图 (B-2区) (1/100)



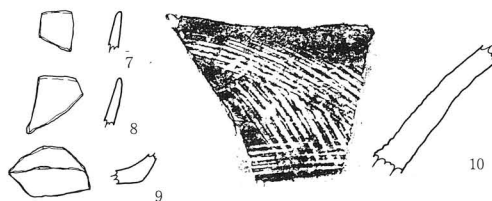
第49图 7号掘立柱建物实测图 (B-2区) (1/100)



第50図 B-2区出土・白磁染付実測図(1/3)

60cmで平均35cm位である。柱間寸法は梁行が280cm、桁行が200、220cmを測る。桁行方向はN-18°-Eで、総面積は18.46㎡廂部をいれて31.46㎡となる。

B-2区では廂と考えられる付帯施設をもつ掘立柱建物はこの6号が唯一のものである。



第51図 B-2区出土坏・播鉢実測図(1/3)

⑩ 7号掘立柱建物

発掘区の南西部にあって、SB3・4・5・6とともに東西方向に並ぶ一群に属し、SB6に隣接している。3間×2間の建物で、桁行5.9m、梁間3.9m(西側)、4.1m(東側)、床面積23.6㎡ある。柱穴口径の平均28cm、深さ平均52cmを測る。

2. 遺物(B-2区)

白磁皿

1. 高台から口縁部にかけて半完形で遺存するものでPit埋土中より出土したものである。高台が高く、したがって器高も高つくられる。口径12.9cm、器高5.1cm、底径6.5cmを測る。器壁は厚く、口縁端部は丸くおさめられて全体にゆるく内湾している。釉は畳付、高台内が露胎の他はすべて施釉され艶がある。口縁外側直下に細い線刻による波文がみられる。これと同形のものがA-2区で一点出土している。

2.~5. は円形の白磁皿である。2. は復元によって完形となったもので、腰からゆるく立ちあがって口縁端付近で急に外反するものである。器壁が薄く、高台断面は逆

三角形状を呈す。口径に対して、高台径が比較的大きく、器高も低いこともあって、安定感がある。口径11.1cm、器高3.0cm、底径6.0cm。畳付を除く部位に全面施釉された釉は、透明度が低く、白色の強い灰白色を呈する。3.は口径（推）13.7cm。P.10よりの出土である。4.は口径（推）14.0cm。5.はP.8よりの出土である。6.は染付皿の口縁部である。

坏・播鉢

7.8.9は土師器の坏片で、7. 8は口縁部、9. は底部である。磨耗が著しく、9. の切り離しもさだかでない。10. の播鉢片は底部に近い部位で、内面に9条単位の櫛描目が底に向かって斜位に曲線状に施される。

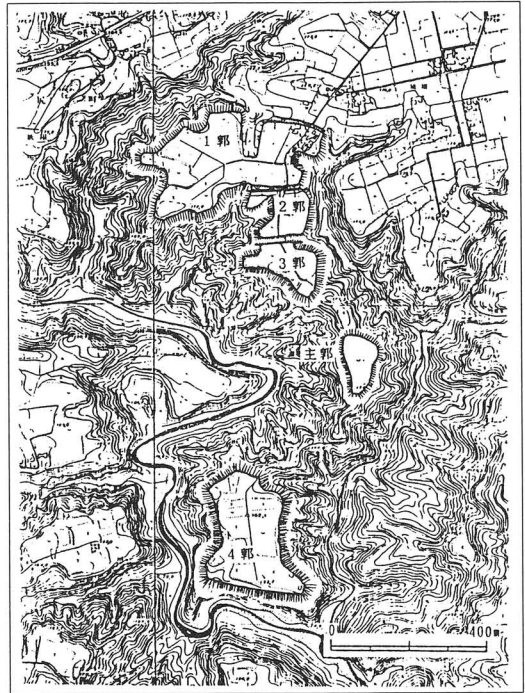
第3章 まとめにかえて

① 縄張り と 郭 について

紙屋城は5つの郭をほぼ南北に「S」字状にくねらせて配置する典型的な連郭式の山城である。第1の空堀から第5郭の南端まで約1.4km。東西は平均450mをはかる範囲を地形上で看取されるところを主要な縄張りとする。

郭の配置は整然として規則的で、東・西・南面の三方は険峻な急崖によって隔てられた要地となり、自然地形を巧みに組み入れて要害を形成するこの時期の山城の典型である。急崖となって谷底まで急落する西斜面・南斜面の谷底には秋社川（あきしゃがわ）が流れ、一方の東斜面下には城谷川（じょうたにがわ）が流れて紙屋城の南端で両河川は合流している。両河川とそれぞれの郭部との比高は80～100mに及び、東西の斜面は複雑に入り込んで屈曲しながら谷部へと落ち、とくに西側のそれは自然の堅堀としての効果を生じている。以上のように東西南面三方の“守”が強固であるのに比べて、北面の“守”はやや脆弱である。それは第1郭となりうる平坦地と、それ以北の面レベルが等しく、あるいは後者が高レベルにありまた何らの障害もなくて、いわば地続きとなっているためである。そこで東西両方向から延びている深い谷部をむすんで空堀とし、北面の守りを固めることになる。

こうして平坦面を人工的に掘削して造られた空堀は、南北に第1・2・3空堀の3条を数える。これ等それぞれ東西から深くて短い谷が侵入し、くびれてウエストラインとなる最短部、すなわち普請の工期と労力が最も省力できてしかも要害としての機能をそこなわない地点を選定して掘削されている。この3条（第1～3）の空堀に続く主郭側の他の堀は連続する険しい小丘の尾根部を断ち切ったり、あるいはそのまま自然の谷地形を利用したと考えられるもので人工的な普請は最少限にと



第52図 紙屋城“郭”配置図

どめられていると考えられる。現在はこの深い谷を農道が土橋状に通るので当時の普請の状態がどこまで残っているのか極めて観察が困難である。したがって、人工的な作為による普請が明らかであるのは3郭までの空堀、土塁、腰郭となる。

明らかに北向きの山城と考えられる本城において第一の空堀が位置する地点は城原地区の比較的小起伏の平場に唐突に築かれた感があり防御をその第一義とする郭の機能をはたすには極めて脆弱な印象をあたえる。したがっておそらく、ここで便宜的に第一の空堀とした地点以北の広地（城原地区）は、“城原”の字名を冠するように、紙屋城全体のいわば“虎口”的な位置を占有するのに十分な、城付帯の施設、あるいは前哨的な集落の存在が想定される。

2郭の北東端の斜面側、第2空堀の崩落した東端に接する部分には第2郭の規模からすると極めて小面積110㎡ではあるが、比高2.0mで一段低くなった削平地があって、これは腰曲輪に相当すると考えられる普請箇所である。腰曲輪が確認される箇所はこのみで他の郭ではみられない。中世山城は数度におよぶ普請による改変、最近の耕作にともなう改変によって地形を変えていることが多く、この箇所以外に普請された可能性は十分にあるが、現地形では遺存しない。ただこの部分も東面は急角度の斜面となる箇所であって、特別に腰曲輪を設ける必要性は低いとおもわれるが、必然性があるとなれば崩落した部分に虎口に相当する第2郭との連絡口が設けられていた可能性がある。

第1郭から3郭に至る間には通路に相当するような施設をみない。各郭間を繋ぐ連絡手段としては、空堀・土塁を横断するための土橋・掛橋が設置されたであろうが、土橋についてはその痕跡を残していない。堀底道は、当城空堀の断面をみてのとおり堀底は鋭角的に堀削されており、堀底も踏み堅められて平坦になった様子もなく、少なくとも恒常的に通路として用いられた可能性は薄い。

第4、5、6番目の堀切に挟まれた部分の2ヶ所は比較的ゆるい傾斜の丘地で、人工的な削平はないものの、郭に準ずる機能を果す何らかの作事がおこなわれていた可能性をもつ。いずれにしても、第3郭と4郭との間の緩衝地としての機能を十分に満している。

第4郭は諸郭のうちもっとも標高の高い位置にあつて、北に第1～3郭、南に第5郭を配し、城域全体からすればやや南に片寄るもののほぼ中心地を占有するかたちをとっている。また、唯一“水の手”遺構が明らかな郭であり、現在でもその名

残りとして、この平坦地は“井戸平”（ツリンデラ）と呼称されている。こうした立地や作事を勘案するとき、第4郭は主郭としての諸条件を備えている。〔註〕

第5郭は主郭とおもわれる第4郭より約10m低い位置にあり、4郭から5ヶ所の堀切を隔てて南西に約500m離れている。5つの郭のうち2番目に広い面積をもち4郭の約6倍ある。第5郭は主郭に対するその立地条件からみて、城主の屋敷ほか諸施設の設けられたいわゆる“千畳敷”に相当する郭にあてられる。第5郭は平場となっているものの南にぐっと下って比較的起伏に富み、居住区は虎口に近い北側に集中し、南側は“らい地”となっていたと推定される。

〔註〕 概報のなかでは第5郭を主郭としてとらえたが、郭の配置や機能を勘案したとき、第4郭を主郭と考えたほうが理にかなう。よって第4郭を主郭と考えたい。

② 紙屋城に係る歴史的な背景

野尻町域内に所在している中世山城が、にわかに中世日向史の表舞台に登場するのは、日向の中世を代表する伊東氏の衰退にかかわる擾乱に際してである。伊東氏はその全盛期において“伊東の四十八城”と称される城を日向のほぼ全土にわたって展開しているが、野尻においては野尻城、戸崎城、紙屋城の三城がその内にふくめられる。伊東氏と島津氏の日向における覇権をほぼ決定づけた木崎原の戦（元龜3年・1572年）後、伊東氏はその権力の象徴であった四十八城の一角である高原城、野久尾城、三ツ山城を失ってしまうが、それ以降は衰微の一途をたどることになる。そうして必然的に西方の守りは、野尻城、戸崎城、紙屋城等の野尻の諸城が島津と踵を接する最前線、いわば境目の城、要衝の地となったと考えられる。

そのころの野尻には、いずれも伊東氏の勢力下に7つの城・壘が設けられていたようであり、西から岩牟礼城、野尻城（城主、福永丹波守祐有）、戸崎城（城主、肥田木四郎左衛門尉）、高松城、漆野城、漆野切寄（今城）、紙屋城（城主、米良主税助重恒）がある。

このうち、岩牟礼城、高松城は繫ノ城に属し、漆野切寄は壘にちかいものと考えられ、紙屋城を根城とする枝城としての位置にあると考えられる。いわゆる居城として文献にあらわれる主要な山城は前述の野尻城、戸崎城、紙屋城の三城である。しかし、この重要な境目の城三城が日向の地に磐石の基礎を築きあげた伊東氏のアキレス腱になってゆくのである。

この三城のうち、いわゆる指導的な立場にあったのは、伊東氏の重臣でもあった野尻城主福永丹波守祐有であり、戸崎城主は終始福永丹波守と行動を共にし、紙屋城主米良主税助もまた福永氏と姻戚関係にあり命運をともしている。福永丹波守と米良主税助とは内山城（圍城）城主、野村但馬守刑部少輔松綱をそれぞれの兄とする女を妻に迎えておりこの三者は密接に繋っており野村但馬守もまた反伊東氏の立場をとっていた。

伊東氏の重臣であった福永丹波守が伊東氏に反するようになった直接的な原因については、先に島津側に落ちた高原城の落城後の島津側城主上原長門守尚近の策略があったといわれる。上原は伊東義祐の本拠地である佐土原に落書し、両者の離反を画策しながら福永丹波守に接近していった。伊東義祐と福永丹波守とのかくしつした主従関係を『日向記』は次のように記している。

“三位入道（伊東義祐）殿聞食ヲ誠トヤ思シケン御折檻ノ為ニ丹波守ニ数ケ度御見参モ不被成其上出仕二三度迄押留メ玉フ、嫡子藤十郎元服ノ為ニ詰タリンシカ无無御見参返サセ玉フ是ニ依テ丹波守腹立涙ヲ流シ二度出仕ハ致スマシキト誓言ヲ立テ帰リケリ”（日向記卷第八目録、依福永逆心没落事）

こうして福永氏は天正五年（1577年）には、上原長門守と気脈を通じて義祐に反旗を翻し、戸崎・紙屋の二城も福永氏に呼応して、西城の一角が瓦解する。しかしこの擾乱はこの一角にとどまらず、ついには伊東義祐の豊後落ち、島津氏の日向における覇権の確立に至るのである。紙屋城主米良主税助重恒は、その後大隅財部に移り紙屋城主には島津方の米良右京が任じられたといわれる。紙屋城は元和元年の一国一城令によって廃城になっている。

参考文献

- | | |
|----------------------|--------|
| 「日向記」日向郷土史料集刊行会 | 昭和36年刊 |
| 「日向郷土史料集」（日向動変記事〔上〕） | 昭和38年 |
| 「宮崎県の歴史」日高次吉 | 昭和45年 |
| 「都於郡伊東興亡史」大町三男 | 昭和59年 |

③ 掘立柱建物について

	I類	II類	III類	IV類				V類	V類	
B-1区			5号	2号	7号	3号	1号	8号	4号	6号
B-2区	5号 4号	3号	7号	1号				6号		
A-2区										

表2. 紙屋城検出掘立柱建物分類表

掘立柱建物はその平面プラン、桁行と梁間の関連、廂を有するか否か、また束柱を有する総柱建物であるかどうかで発掘区ごとに分類を試みている。

正方形の平面プランを有するI類はB-2区で2棟(2×2、2×3)検出され、その他の発掘区では検出されていないものである。II類の極めて正方形プランに近い3号はその平面形状と、3号・5号との位置関係から性格的にはI類に含めて考えるのが妥当である。このI類は、ほぼ同一方向に並んで近接しており同一性格を窺わせている。これらは中央に束柱を有しないものの高床の倉庫に近い機能を有する建物かと推定される。2間×3間のごくオーソドックスな形態をもつIII類の掘立柱建物はB-1区で1棟、2区で2棟検出され身舎面積22~27㎡のなかにおさまる。IV類の梁間1間、桁行3間~5間の掘立柱建物もまたポピュラーなものであるが、身舎の面積で見るともっとも小さな16㎡からもっとも大きな52.8㎡とその面積にはバラつきがみられる。特にB-2区の1号掘立柱建物は桁行が5~6間あって、梁間にくらべて長大な大型の建物である。廂を桁行方向にもつ建物であるV類はB-1、2区それぞれ一棟ずつ検出された。B-1区のそれは1(2)間×3間の身舎の片翼に、2区のそれは1間×3間の身舎の両翼に廂を有する。

中央に束柱を有する総柱建物はB-1区で2棟検出された。4号掘立柱建物は2間×3間に束柱2本、6号掘立柱建物は2間×5間に束柱3本でやや変則的である。いずれも、3号・5号の建て替えであり、主軸の向きを90°東に振る。束柱を有するこ

とから倉庫等の建物かと考えられる。

山城の郭内に所在する建物については、食糧・武器等の城置物を常備する各種の蔵、またそれらの物質を確保し、戦闘に備える城番衆の結める兵舎、いわゆる陣屋のあったことが知られているが、B-1区、2区の規則性のある配列は、上記の機能を有する建物群であったことに矛盾はみられない。

(付) 樹種分析の結果

紙屋城址遺跡出土の柱根の樹種について

大塚 誠

紙屋城（中世）跡から発掘された柱根2個体の、樹種識別を行った。その結果、2個体とも「広葉樹イスノキ」と判断する。

樹種：イスノキ *Distylium racemosum* Sied. et Zucc.

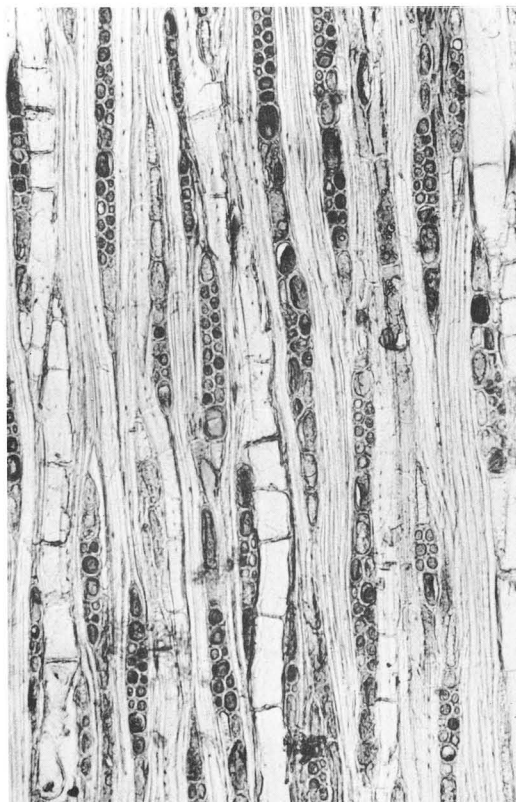
横断面



広葉樹 散孔材

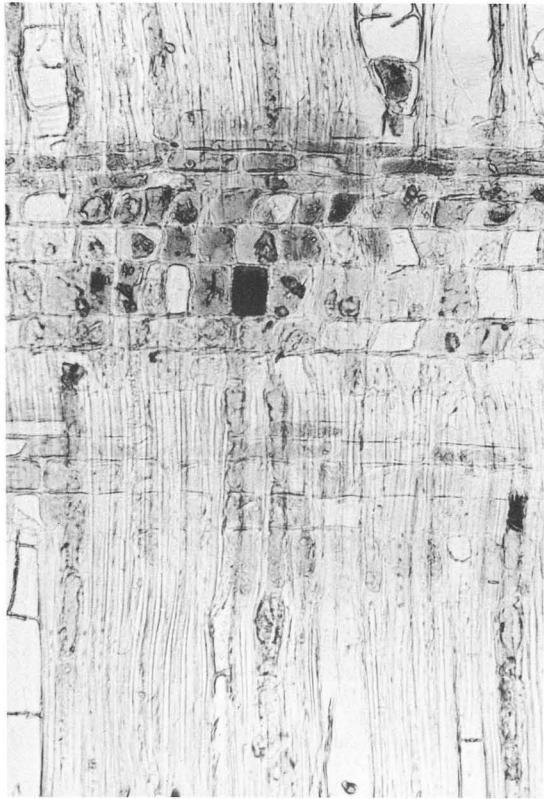
道管の直径は小さく、分布数が多い
木部柔細胞は接線状に配列

接線断面



放射組織は単列、2列

半 径 断 面



道管の穿孔は階段状
放射組織は異性

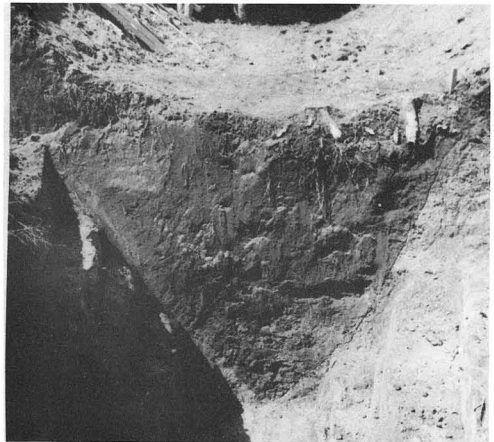
版 图



第 3 空堀現況



堀断面精査状況



第 3 空堀・堀底部分



第 3 空堀第 2 断面

図版 2



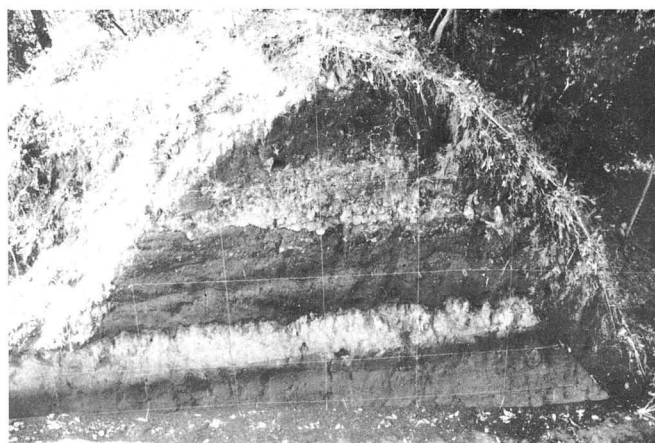
第 2 土壘現況



第 2 空堀断面精査状況



第 2 空堀断面



第 2 土壘断面



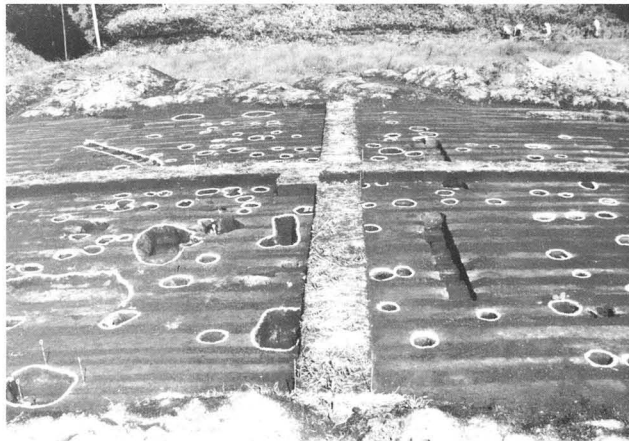
A-1 発掘区 (第2土塁・空堀を眺む)



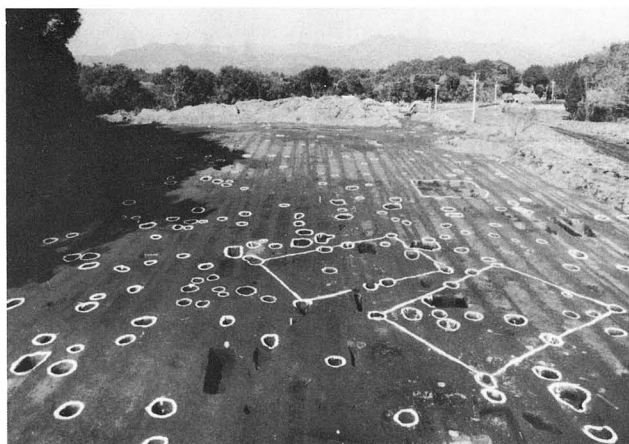
17号柱穴



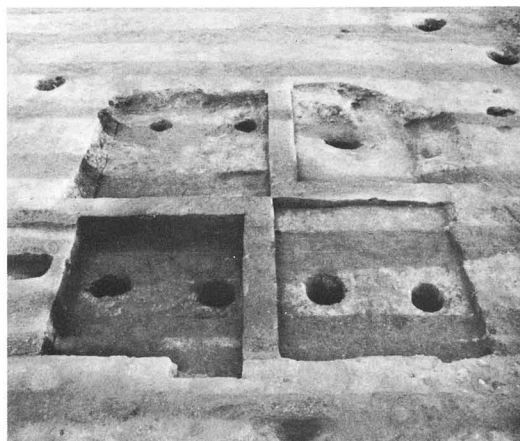
17号柱穴断面



A-1 発掘区



A-2 発掘区



1号竖穴住居

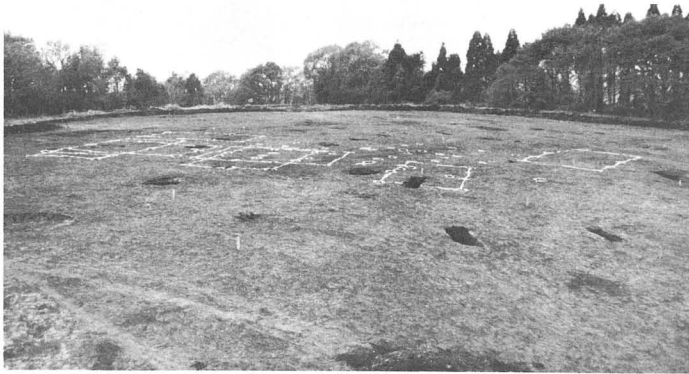


1号土壇

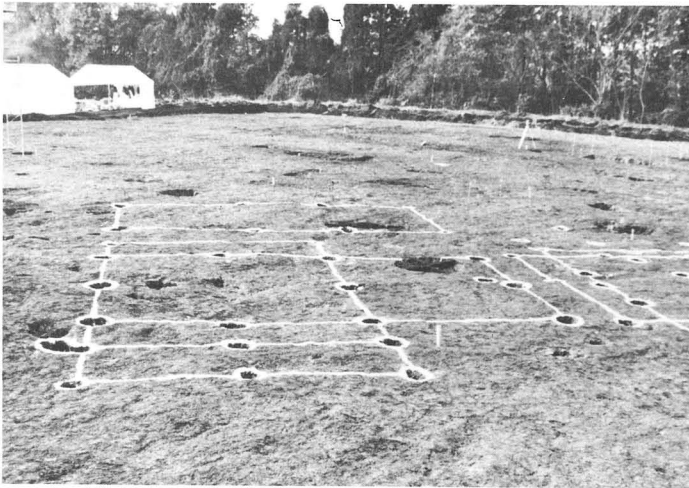


柱木

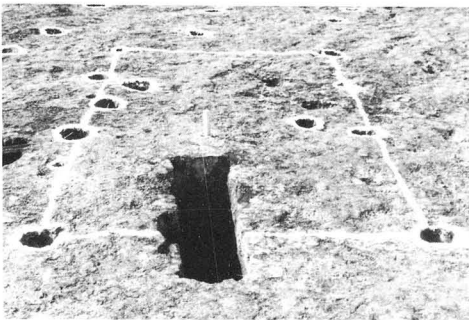
柱根の遺存する柱穴



B-1 区遠景



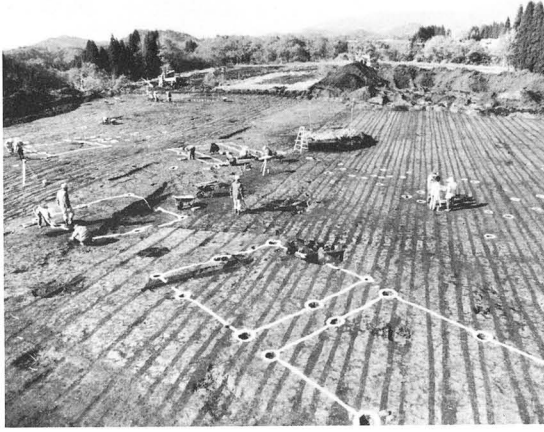
5·6·7号掘立柱建物近景



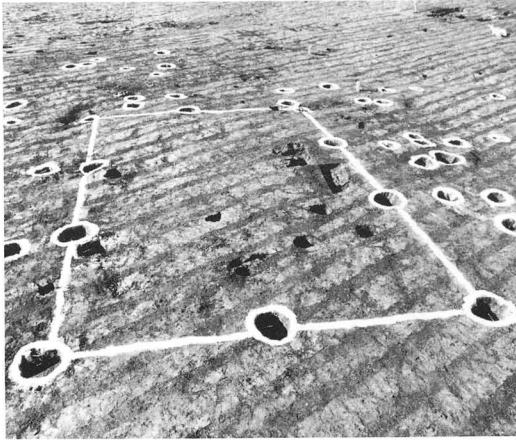
2号掘立柱建物



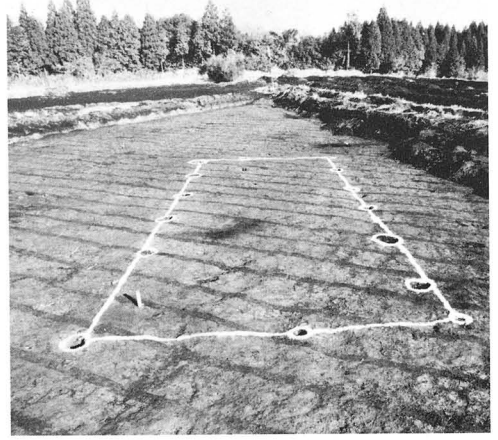
1号掘立柱建物



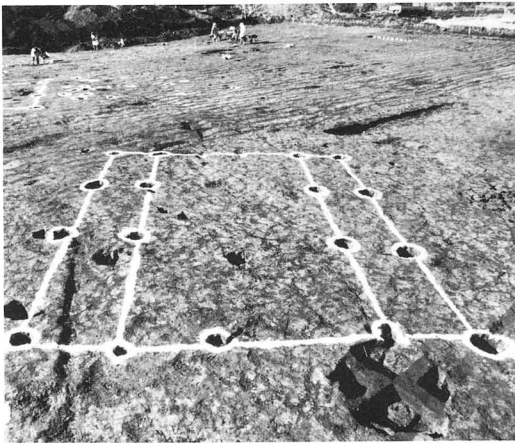
B-2区 発掘状況



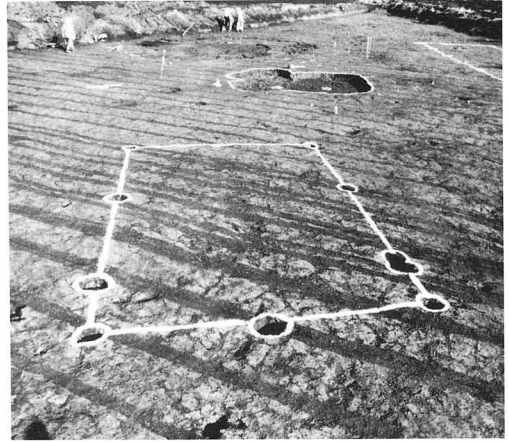
7号掘立柱建物



1号掘立柱建物



6号掘立柱建物



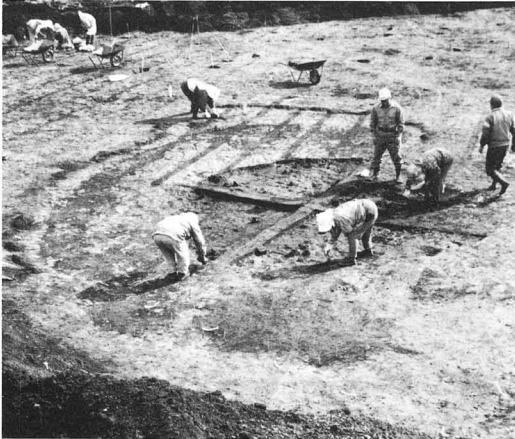
2号掘立柱建物



1号竖穴住居検出状況



2号竖穴住居検出状況



1号住居発掘状況



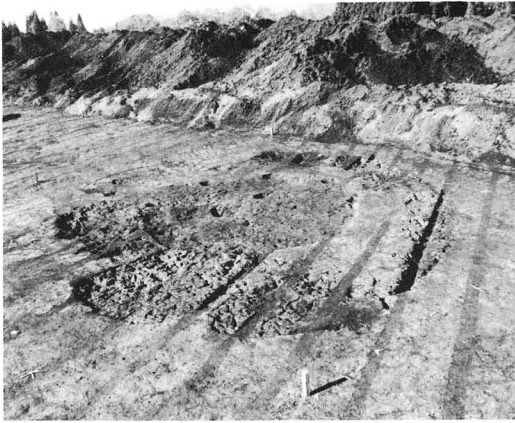
2号住居発掘状況



1号・2号住居発掘修了状況



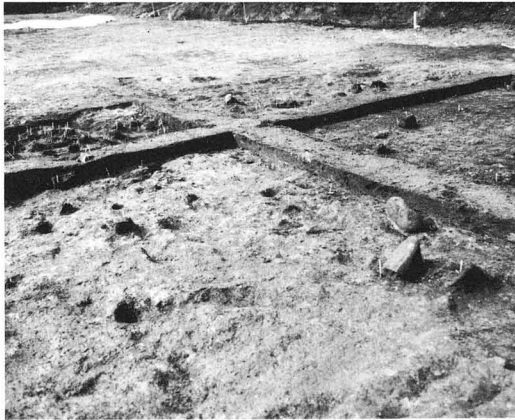
1号・2号住居発掘状況



1 号竖穴住居



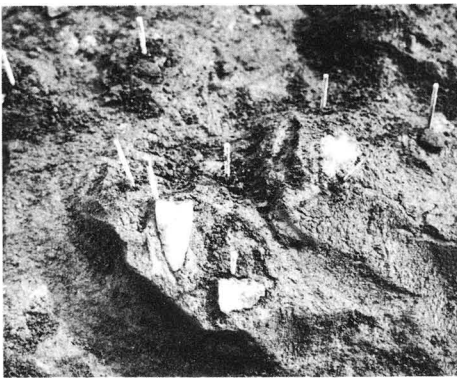
2 号竖穴住居



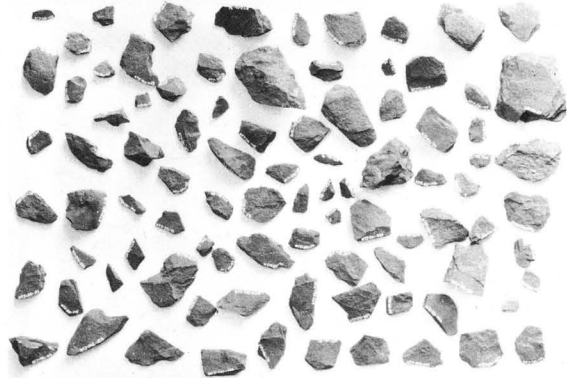
1 号住居遺物出土狀況



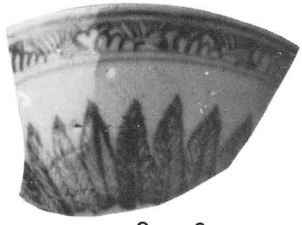
2 号住居遺物出土狀況



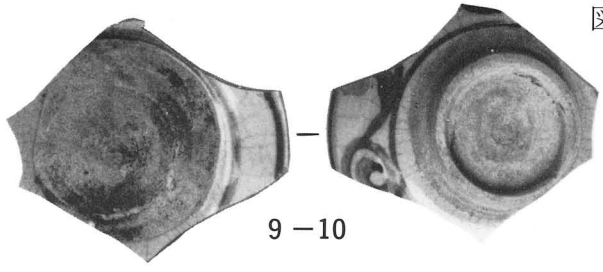
磨製石鏃出土狀況



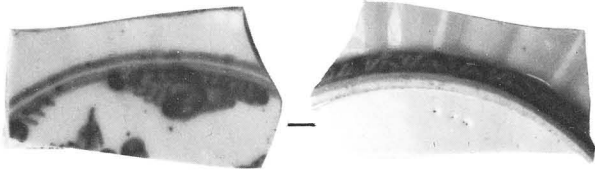
1 号住居出土泥板岩製剝片



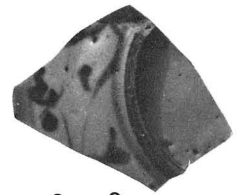
9-6



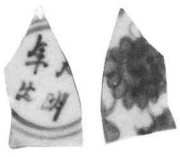
9-10



9-8



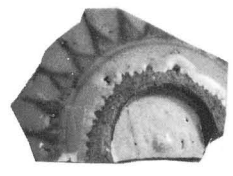
9-9



9-5

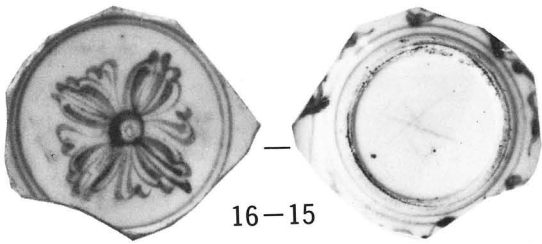


9-3

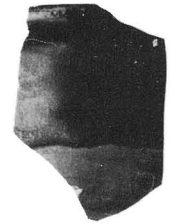


9-7

A-1区出土遺物



16-15



第3空堀

A-2区



16-23



17-9



17-8

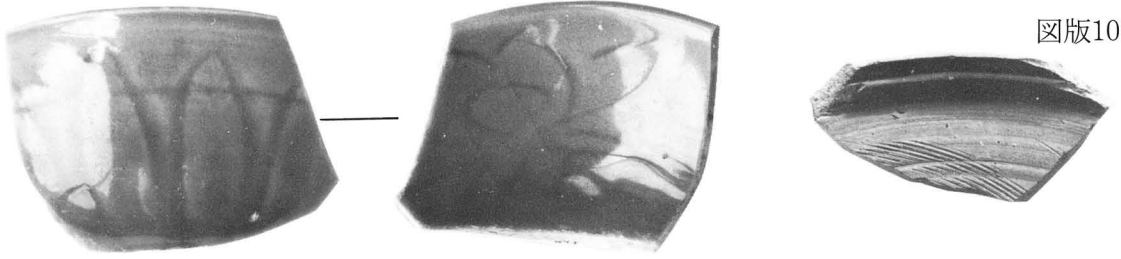


17-1

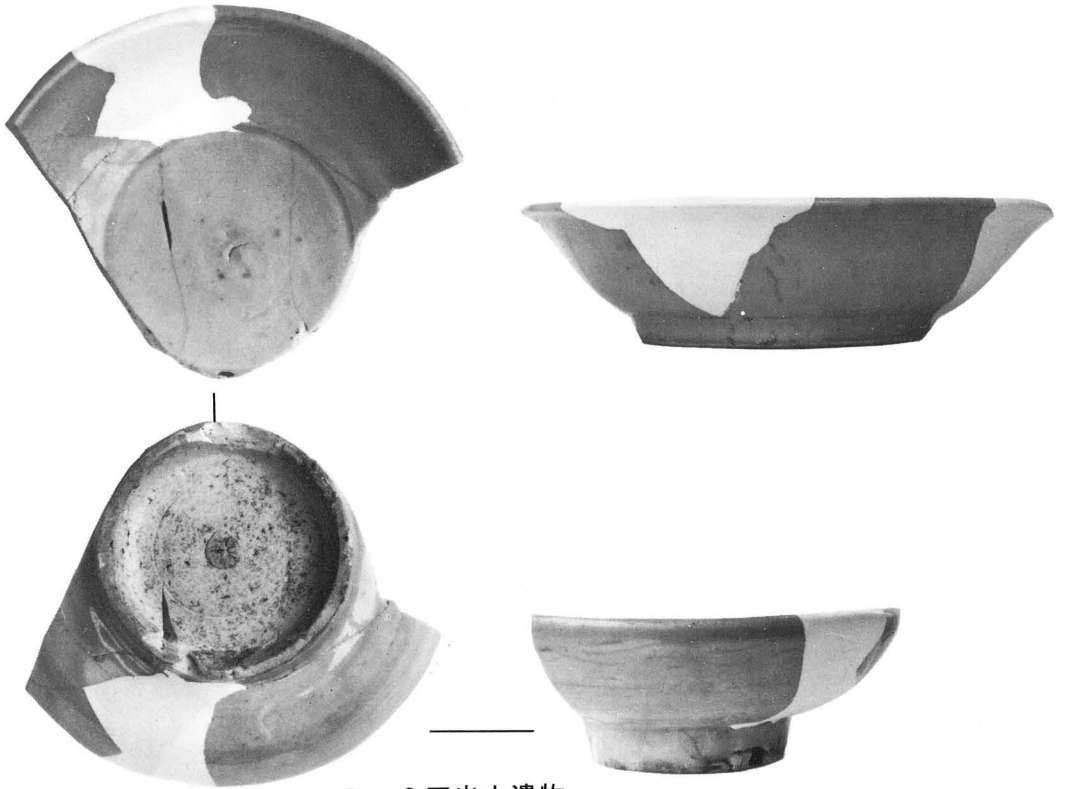


17-2

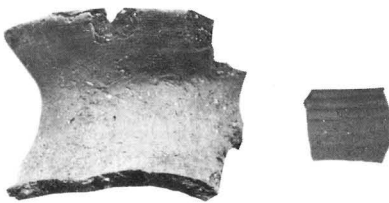
A-2区出土遺物



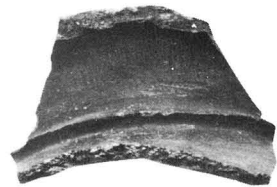
第3空堀出土遺物



B-2区出土遺物



1号竖穴住居出土遺物



2号竖穴住居出土遺物

漆野原県営ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成2年3月

発 行 野尻町教育委員会